

歓声の軌跡

ピーチ

栄光

あの夏、確かに俺は満員の観衆の視線の先にいた。
皆の期待を一身に受け、マウンドにあがっていた。
県予選でノーヒットノーランを達成した時も、
甲子園行きの切符を手にした時も、
スポーツ紙の1面になった時も、
常に中心は俺だった。

だから、、、まさか初戦で敗退するなんて考えてもいなかった。
決して驕っていた訳ではない。
人一倍練習だってしてきた。
色々我慢もしてきた。

ただ、、、
勝利の女神は俺には微笑まなかった。
ライトの頭上をボールが越えた時、
自分の夏が終わったことを悟り、
ゆっくりとホームベースに向かった。

人目も憚らず、ただただ泣き続けた。

喪失

短かった甲子園が幕を閉じ、長く住み慣れた寮を離れて実家に戻った。
親戚や近所の人が盛大に迎えてくれた。
精一杯の笑顔で応えたが、心の中はずっと穴が開いていた。

暇つぶしに電源をつけると、否が応でも甲子園での熱戦を報じるテレビ。
「俺もまだここにいたはずなのに、、、」という思いが心を離れず、
落ち着いた気持ちで過ごすことが出来なかった。

その年の優勝校が、初戦で俺が負けた相手に決まった日、
いてもたってもいられず、学校のグラウンドに足を向けた。
負けて以来手にしていなかったボールを、ただただ無心に投げたかった。

がむしゃらに投げ込んでいる時、ふと顔をあげると、担任の先生が職員室のほうから手招きをしていた。
投球を中断し、駆け寄ってみると、段ボールを渡された。
「お前宛のファンレターだ」

家にも親戚・友人からの手紙や花、プレゼントが届いていたが、
学校にもここまで届いてるとは。
お礼もそこそこに、段ボールから紙袋につめなおし、家に帰った。

今思えば、最初の動機は不純だったかもしれない。
たくさんの女の子から、何百通も自分宛の手紙が届けば
高校生だった頃の俺が舞い上がるのも仕方ないよな、と今でも思う。

あの頃は、付き合っている彼女もいたし、
特に不満もなかった。ただ、正直遊びたい気持ちもあった。
最初に開いた手紙を読むときも、文章よりも最初にプリクラを見たくらいだった。

「まあ、そこそこかな、、、」なんて思いながら文章に目を落とすとそこには

「スポーツを見て、こんなに感動したのは初めてでした。
勇気をもらいました。これからどんな道に進まれるとしても貴方らしく頑張ってください。」

私は、その道を全力で応援したいと思います」

短いけれどなんだかぐっとくる、一言が書かれていた。

他の子の手紙は「好きです」とか「カッコいいです」とか

「付き合ってください」とか「彼女はいるんですか？」とか

そんな内容がほとんどだった。だからこそ、あの手紙が心に残っていた。

野球部の仲間との1泊2日の旅行から帰宅した日、

ふと、あの手紙をくれた子に電話を試してみようかな、と思った。

「大学進学かプロに行くか」そんなことを仲間と話したからだったかもしれない。

封筒に貼ってあったシールに書いてある携帯の番号を

慎重に押し、少し緊張しながら呼び鈴を聞いていた。

しばらくすると、留守番電話に切り替わった。

「知らない番号からの電話に出ないか」と思いつつもう一度だけ、かけなおした。

これでかからなかったら、違う子にでもかけてみようか。なんて思っていたら、

「もしもし？」という怪訝そうな声で、女の子の声が答えた。

この時は、自分がこの子のことを好きになるなんて、夢にも思っていなかった。

音色

俺が名乗ると、絶句したあとに、「嘘でしょー！」と叫んでいた。

勢い余って階段をかけ落ちてしまったらしく、電話口から鈍い音が聞こえた。思わず、笑ってしまった。

その後も、お互いどこか落ち着かない声で会話をし、しばらくしてから電話を切った。

切る直前に「また電話してもいい？」と聞いていた。

今思えば、なんでそんな風に言ったのかわからない。

特典、面白い話をしたわけでもないし、彼女が住んでいるのは東京だ。

今となっては大した距離でもないが、あの頃の俺からすると、かなり遠い場所だった。

それからは、ほぼ毎晩電話をかけた。

逆に、朝は起きたかどうかの確認メールをしてもらい、

起きれなさそうな日は電話で起こしてもらっていた。

母親も「あんた最近寝坊しないね」と少し不思議がっていた。

まだ1度も会ったことがない子なのに、

なんだか魅かれている自分がいた。

電話越しに聞こえる心底楽しそうに笑う声や、

朝起こしてもらおうときの少し眠たそうな声を聞くのが好きになっていた。

「いつか会う日がくるだろうか？」

早く、その日が来ればいいのに、そう思っていた

しばらくしてから、付き合っていた彼女に疑われるようになった。

「いつ電話しても話し中。誰と話してるん？メールも返事ないし」
会うと喧嘩ばかりだった。口を開けば、「私のこと本当に好きなの？」と聞かれ、正直少しうんざりしていた。

丁度この頃、俺の身边はにわかには騒がしくなっていた。

「ドラフトで何位に指名されるか」スポーツ紙では様々な予想が出回っていた。
ただ、俺の中で踏み出せない気持ちもあった。

生まれつき体がそこまで丈夫ではなかった自分が、
果たしてプロ野球の世界でやっていけるのだろうか？
小さい頃から、目標にし、憧れていた世界だ。

ただ、甘くない世界なのも勿論承知だった。
だから、社会人野球も考え、就職試験も受けた。
幸せな結婚にも憧れていたし、安定した道を選びたい気持ちもあったのだ。

周囲にも相談していたが、思い切ってデート中に彼女にも聞いてみた。
「俺、どうしたらいいと思う？」と。すると、彼女は悪びれずに
「えー、プロに行ったほうがいいって。そっちのほうが自慢できるやん」

悪気がなかったとはいえ、
なんだか無償に淋しい気持ちになり、帰宅して半ば無意識に電話をとった。
すっかりかけ慣れた番号を押し、少し話したあと、同じことを聞いてみた。
「俺、どうしたらいいかな？」

すると、少しの沈黙のあと、思いがけない答えが返ってきた。

「私がどうこう言える立場じゃないし、無責任に聞こえるかもしれないけど、
これは自分自身でしっかり考えて答えを出すべきことだと思う。
いくらでも話は聞くし、相談にも乗るけど、最後は自分で後悔がないように決めないと。
でも、誰にでも訪れるチャンスなわけではないから、挑戦出来たらすごいな、とも思う。
けれど、社会人でもプロの世界でも、最後に頼れるのは自分しかいなくなるんだから。
後悔がないように。ただ、どんな道であろうと、選んだ道を私は全力で応援するよ。」と。

この瞬間、俺の気持ちは決まった。

迷いがなくなった。

「プロに行こう。そして、1軍のマウンドで投げている姿をこの子に見せよう」と。

進路

運命のドラフト会議の日、この朝もいつものように電話で起こしてもらい
「絶対大丈夫だよ。夜には笑ってるから、安心しなよ」

と、今となってはどちらが年下かもわからない励ましを受け
俺は少し苦笑いしながら電話を切った。
不思議と、電話を切ると少し落ち着いていた。

「もう指名されないのかな、、、」と思った瞬間、
教室の扉が開き、監督に手招きされた。
クラスメイトにみつめられながら、足早に教室を出た。

職員室で指名を告げられた。
希望していた球団のうちのひとつだった。
まだ自分が夢の世界にいるようだった。長年の夢が一つ叶ったのだ。

気が付いたら、両親には監督が早々に電話をかけていた。
それを横目で見ながら、制服のポケットの携帯に手が伸び、
きっと、何よりも俺からの連絡を待ちわびているであろう、彼女に電話をした。

1秒もたたないうちに電話に出た。
どうやら、学校を休んだらしい。朝はそんなこと一言も言っていなかったのに。
電話口から何も聞こえなかったので携帯を耳に押し当てると、小さな啜り泣き声が聞こえてきた。
。

「これでやっと会える」

力強く言って、電話を切った。

序章

一度も会ったことがないまま、数か月が過ぎていた。
が、不思議とすでに会ったことがあるかのような、そんな気分だった。
高校を早退してくると言っていた彼女が、いつ会場に姿を現すか、ずっと緊張していた。

そう、新入団選手の会見の後の会場に、彼女を呼んでいたのだ。
誰よりも先にユニホームを見せてあげたい、と思っていたのと、
会ったことがない人と、急に二人で会うのは不安かもしれない、と思ったからだ。

会場は大勢の報道陣や選手の家族、球団関係の人でにぎわっており、
お酒も飲めない立場の自分としては、愛想笑いを浮かべて周囲と話すことくらいしかやることが
なかった。

一向に彼女が現れる気配がないので、なんども携帯を取り出してみたが、連絡はきていなかった
。

と、ちょうど同期になる選手と写真におさまっていたその時、
ドア付近から視線を感じた。ゆっくりと振り返ると
遠慮がちに、扉の近くに佇んでいる女の子が一人いた。

周囲の賑わいを背に、ゆっくりと歩みよった。

聞きなれた笑い声で「はじめまして」という彼女の笑顔を見たとき、
今までの緊張が紐解かれ、俺も返すことが出来た。

「はじめまして、、じゃないか（笑）」と。

交差

会見から1か月後の底冷えする1月に、球団の寮に入るために地元を離れることになる。年末年始はここぞとばかりに地元の友達と会い、練習もそこそこに遊び倒した。引っ越しの準備をしていると、あの日偶然手に取った手紙が学生鞆の中から出てきた。

まだ半年も経っていないのに、随分昔にもらった手紙のような気がした。

「どんな選択であろうと、全力で応援します」
この一言で、吹っ切れたことを思い出し、地元を離れる淋しさより、新しい環境に身を置くことを楽しみにしている自分がいた。

雪が少し舞う中、入寮した。
一人部屋だったが、これからまた集団生活が始まる。
正直、集団で群れて行動するのが苦手だし、周りの目が気になってしまう性質だ。
ただ、こればかりは仕方がない。

段ボールをひも解く元気もなく、携帯に手を伸ばした。
暫くすると、留守番電話につながった。
まだ学校で授業を受けているのか？
友達と遊んでいるのかもしれない。
大したことではないのに、無性に腹が立った。

その日の夜ごはんのときに同期に愚痴をいったら、
「まだ数回しか会ったことがないのに、すっかり彼氏きどりだな（笑）」
と言われてしまい、それ以上は何も言えなかった。

まだ付き合っているわけでもないし、束縛する権利があるわけでもない。
なのに、慣れない環境に身を置き、ふと孤独を感じる瞬間が多いと
つい、彼女に寄りかかりたくなってしまう自分がいた。

夜、電話がかかってきた。
「どうした？部活で出れなくてごめんね」と。
つい最近聞いたはずの声なのに、無性に懐かしかった。

今までより近い場所にいるはずの彼女が
今までより遠くに行ってしまうような気がして

気がついたら、「俺と付き合っ欲しい」と思わず口に出していた。

「え？」

「あ————もっといいシチュエーションで言うつもりやったのになー」

「本気で言ってる？」

「もちろん」

「色々な意味で自信がないんだけど、、、よろしくお願いします」

こうして、1通の手紙から始まった俺たちは付き合うことになった。

付き合い始めたからといって、劇的に何かが変わったわけではなかった。
今までのように毎朝起こしてもらい、夜はその日あった出来事をお互いに話した。
ただ、休みの日が合わないので、会える時間は短かった。

学校を休んだり、早退したり、、、
彼女は口にこそしなかったが、かなり無理しているはずだ。
それなのに、別れ際に彼女が申し訳なさそうな顔で、
改札手前で手を振るのを見送るのがもどかしかったし、申し訳なかった。

そんなとき、オフの日に先輩に飲みを誘われた。
軽い気持ちで「行く」と返答し、一緒にタクシーで向かった。
飲み屋に到着した時に、合コンだということに気づいた。

「夜、飲み会終わったら電話する」と彼女に伝えていたが、
結局、朝方まで盛り上がってしまったので、電話することが出来なかった。
朝、二日酔いで重い頭をひきずりながら、彼女からの電話に出た。

開口一番「盛り上がりすぎちゃった？（笑）大丈夫？」
と少しも怒った様子さえ感じさせない口調で言われた。
逆に心が痛んだ。
「うん。先輩に飲みで連れまわされて大変だった」と少しだるそうに伝え
「今日は絶対夜電話するから」と伝え、電話を切った。

一気に後悔の波が押し寄せてきた。
自分の横に目を移すと、名前さえよく覚えていない女が静かに寝息をたてていた。

後悔

自分でもあまり記憶がない。

と言うと、言い訳がましい男になってしまう。

ただ、その場の雰囲気にもまれて、そういう風になってしまった。

彼女がもっと電話口で怒ったりしていれば、

こちらも感情的になり、逆に自分の行為を正当化出来たかもしれない。

けれども、おそらく全てを見透かしている彼女は、騒ぐことも怒ることも泣くことも、何もしなかった。

それこそが、彼女の精一杯の抵抗だったと思う。

見知らぬ女を起こし、一緒に朝ごはんを食べ、

とりとめのない話をして、昼前に別れた。

二度と会うことはないだろう。

あの頃の俺は環境に適応できない自分、野球での実力を発揮できない自分
色々な事に嫌気がさしていた。

どうしたらいいかわからず、人恋しくなり、この事件の後も
同じような過ちを繰り返すことになった。

それなのに、どんなにひどい裏切りを犯しても、彼女はいつも許してくれた。

ただ、いつもどうしようもなく寂しい目をした後に、

少しだけ笑って「もうしないでね」とつぶやきながら。

自分でもどうしたらいいか、わからなくなっていた。

本当は、彼女にもっと構ってほしかったのだ。

だから、わざと別の女という時に彼女に電話をかけたつもりもした。

それでも、彼女はいつも耐えていた。

きっと、俺に嫌われたくないから無理をしているのだろう。

そこまでわかっているのに、自分を変えられないことに、どうしようもない苛立ちを感じていた。

そんなとき、久しぶりに彼女を喜ばせられる出来事が起きた。

打開

7月になって初めて、2軍の試合ではあるが、登板することになったのだ。前日の練習の後に監督から言い渡された後、彼女にすぐさま電話した。電話の向こうで、久しぶりに心底嬉しそうにはしゃぐ彼女の声を聞き、なんだか、自分もとっても嬉しかった。

翌昼、どうやって調べたのかわからないが、閑散とする試合球場に彼女はやってきた。端の方でひっそりと、こちらまで心臓の音が聞こえてきそうなくらい緊張した面持ちでこちらを見つめていた。おかげで、自分が緊張するのをすっかり忘れてしまい、逆にいいピッチングが出来た。

先輩やコーチにも褒められ、その日は上機嫌で寮に戻った。彼女からも「初登板おめでとー！ご両親も本当に喜んでるだろうね。遠くて見にこれなかったし、電話してあげてね」とメールがきていた。彼女の、こういうところも好きだった。

2軍で初めて投げたことで、より「早く1軍のマウンドで投げている姿を見せたい」と思うようになった。無論、彼女には恥ずかしくてそんなことは伝えられなかったけれども。

くすぶっていた気持ちが少しずつ解され、甲子園を目指していたあの頃の気持ちを思い出した。

そんな矢先、事件は起こった。

翌日の練習の時に肘に激痛が走った。

いつものように、軽い投球練習をしている最中のことだった。
右腕に激痛が走り、思わずその場にうずくまってしまった。
コーチがすぐに駆け寄ってきて、そのまま球団ドクターのいる病院に連れて行かれた。

「遊離軟骨ですね。結構厄介な場所に出来てます」
いわゆる「ネズミ」だ。ピッチャーの職業病と言えるかもしれない。
手術をして、成功して復帰している人も沢山いる。
念のために聞いてみた。「また、投げられるようになりますよね？」

すると医者は、「いや、わからない。人によってさまざまだし、
君の場合、復帰には少し時間がかかるかもしれない」と、能面のように表情を変えずに、言い放った。
それを聞いたコーチは少し医者フォローするように
「手術するなら早いに越したことはないぞ。取り返しのつかないことになる前に」

「取り返しのつかないこと」その言葉だけが頭の中をこだました。
俺にとっては、それは肘が治らないことではなかった。
ただ、そんなことは医者やコーチの前では言えない。

「考えさせてください」
そう言い放って、挨拶もせずに診察室を後にした。
あわててコーチが後から追いかけてきて、車中は無言のまま練習所に戻った。

結論を出さないまま、1週間が過ぎていた。
すると、夜中に彼女から今まで聞いたことがない怒った声で電話がかかってきた。
「なんでこんな大事なこと黙ってるの??」

痺れを切らした先輩が、彼女に電話して肘のことを話してしまったらしい。
直接会って話をしたかった。ただ、自分は門限でどうしても外出出来ないことを詫びながら、
タクシーで来るように伝えた。

1時間後、寮の窓に「コツン」と石が当たる音がした。
窓を開けると、初めてみる、泣きはらした彼女の顔があった。
何とっていいかわからず、とりあえず抱きしめるので精一杯だった。

俺は本当の気持ちを伝えていいのだろうか？迷いながら彼女を部屋に招き入れた。

「黙っていないで説明して。」凄味のある声で言われ、思わず委縮してしまった。
こんな彼女の声は、いままで聞いたこともなかった。
途切れ途切れ、下を向きながら「まだ手術を受けるかどうかを悩んでいること」を正直に伝えた。

すると、彼女はまっすぐと目を見て、
「こんな大事な話を、誰にも相談せずに一人で決めてしまうつもりだったの？
自分だけのことだと思ってるかもしれないけど、周囲はみんな心配してるよ。
そんなことにも気付けないなら大馬鹿者だし、何より、相談に乗れない自分が悲しいし、悔しい」と。

もう彼女の目に涙はなかった。
「ごめん」と謝り、普段からいかに自分が彼女を不安にさせているかを再認識した。
自分が情けなかった。前向きに手術を考えること、を約束して場はいったん治まった、、、、

ただ、やはり彼女にはどうしても手術を受けたくない理由を言えなかった。
言った瞬間、彼女に大反対されてしまうことがわかっていたからだ。

手術をしなかったことで、二度とボールが投げられなくなっても、
日常生活に影響を及ぼすくらいの後遺症が残ったとしても、、、、

「たとえ、一回しか投げられなくても、彼女に1軍で投げている姿を見せたい」

いつからかたてていた自分の中の誓い。
その思いだけは譲れなかった。

気がついたら、外は少し明るくなり彼女は少し眠そうに眼をこすっていた。
窓から差し込む日差しを二人で見つめながら、このまま時が止まってしまえばいいのに、、、、
と思ったその瞬間、彼女がぽつりと言った。

「野球してても、してなくても、何をしてても好きだからね」
きっと、彼女は気づいていたのだろう。俺の真意に。
それなのに俺はただ、「ありがとう」とつぶやき返すことしか出来なかった。

外では蝉が力強く鳴いていた。

今になってあのころの二人を思い返すと、
いつもぎりぎりのせめぎ合いの中での関係性だった。
お互いいつも不安だったし、でもそんな自分の気持ちをどうすればいいか、
その対処方法をまだ知らない。二人ともまだまだ子供だった。

彼女は俺と違い、東京の進学校に通い受験勉強も大変だった。
俺がプロ入りした年、世の中的に「受験の天王山」と言われる高校3年だった夏も、
最低週に1度は、片道1時間以上かけて会いに来てくれた。

不満を口にも顔にも出さず、それ以外の時間はほとんど勉強に費やしていたようだ。
彼女は志望校さえ、俺の住んでいるところの近くに変えた。
嬉しい反面、俺はどんどんそのプレッシャーに耐えられなくなっていった。

「ここまでしてもらっているのに、俺は何をしてあげられているんだろう？」

1軍で活躍しているわけでもない、今となっては一瞬の栄光のように思える甲子園での
俺の姿をいつまでも覚えて、期待している彼女の気持ちが、
俺には重かった。弱音を吐くことも出来なかった。

また、いつも「物わかりのいい」彼女に対して、歯がゆい気持ちが募っていった。
自分で酷いことをしていると知りながら、わざと嫉妬させるような行動をとったりもした。
けれど、変わらず彼女はいつも冷静で取り乱さなかった。

そんな関係に少し疲れていたところに、事件は起きた。

衝突

まだ残暑厳しい日だった。

彼女と2週間ぶりくらいに会う予定だった。

最近少し冷たくしてしまったので、この日は思いっきり甘やかしてあげようと思っていた。

彼女とよく待ち合わせをしていたホテルに前日の夜からチェックインし、

久しぶりに寮を離れ、一人でリラックスした時間を過ごしていた。

静かな部屋に、電話の音が鳴り響いた。

最近少し遊んでいた女の人からだった。

「人」と呼んでいたのは、自分より10才近く上だからだ。

ただ、年下にも関わらず変に大人びている彼女より、

この女の人の方が感情を露わにする、どちらかということ

子供っぽい、そんな人だった。

近くに住んでいたもので、いつでも会えて、

良く言えば都合が良かったのだが、

なんだかんだでガラガラと関係は続いていた。

電話に出ると「今から会える？」と。

普段だったら寮にいるのでなかなか自由にはならないが、

今日は外泊していたので、気兼ねなく遊べた。

ホテルに来てもらい、その人が

「他に女が来るの？」と聞くので、適当に誤魔化した。

この人には、彼女がいることを伝えてはいなかった。

彼女と過ごすためにとった部屋で、別の女性と泊まるのは少し悪い気がしたけど、

結局誘惑には負けられず、そのまま朝まで過ごしてしまった。

この女の方は、そろそろそういう年なことも手伝ってか、ふとした瞬間に

「あたしもそろそろ結婚したいなー」などと、つぶやくことがあった。

翌朝、二人でゆっくり朝ご飯を食べ、彼女が到着する14時までに

どうにかして帰ってもらわないといけなかった。

さりげなく「今日何時ころ帰るの？」と聞くと「今日は仕事休みだからゆっくりできる」

と言われ、内心焦った。しかし、ここでバレては面倒くさいので平静を装っていた。とりあえず、シャワーを浴びてスッキリしようと思った。

シャワーを浴びている最中、携帯が鳴った気がしたが、すぐに鳴り止んだので、その後は全く携帯を気にすることなく、どうやってこの人に帰ってもらおうか、思案していた。後2時間しか時間がなかった。

そう思った瞬間、ドアをノックする音が聞こえた。
？ルームサービスなんて頼んでいないけど、、、
と考えているうちに、女の方はさっさとドアに手をかけていた。

「誰？」と口に出すと同時に目に飛び込んできたのは、初めて見る、今にも号泣しそうな、彼女の潤んだ目だった。
なぜ2時間も早く？しかも、なぜ直接部屋に？

ただ、混乱する余裕もなく、次の瞬間から女の方が喚きだすのをなだめなければならなかった。

「この女誰？どういう関係なの？」とまくし立てるそばで、感情を失った人形のような表情で座って黙っている彼女、、、
見ているこちらが痛々しくなるほど疲れた顔で、ただただ立ち尽くしていた。

震撼

暫くすると「今日はもう帰ります」と短く言い残し、彼女は部屋を後にした。
なんとしても追いかけたかったが、この泣き叫んでいる女の人を一人で部屋に置いておくのは、
さすがに危険だと思った。それにしても、なんという一日だ。
折角、今日は大切な記念日だったのに、、、。

彼女が覚えていたかはわからないが、
俺が1年前、初めて彼女に電話をかけた日だった。
たった1年前なのに、あのころの初々しかった二人の会話を思い出して
記念日がこんな風になってしまったことを心底申し訳なく思っていた。

漸く女の人落ち着き始めたと思ったその時、
先輩から電話がかかってきた。
「お前、今すぐ病院に来い！」

いつもは冷静な先輩があまりにもすごい剣幕で怒鳴るので、
困惑しながらも女を振り切り、タクシーに乗ってから再び先輩に電話をかけた。
「何があったんですか？」

「お前の彼女が流産しそうだから、とにかく早く病院に来い」
冷静さを取り戻した先輩が落ち着いた声で的確に病院までの道を指示してくれた。
ただ、俺自身は冷や水を浴びたように震えあがっていた。

流産、、、、ということは彼女が妊娠しているということだ。
そんな当たり前のことも混乱してしまい、うまく整理が出来なかった。
「大事な話がある」と数日前に電話で言っていた気もしたが、全く気にとめてなかった、、、、

とにかく無事であってほしい、と祈りながら病院にかけつけ、
待合室で貧乏ゆすりをしている先輩を見つけ、駆け寄った。
「何があったんですか？」なんだかひどく滑稽なセリフが口をついた。

この病院は、先輩の彼女が働いている病院で、
彼女がつい1時間ほど前、駅前でうずくまっているところを救急車に乗せられ
搬送されてきたのを偶然先輩の彼女が通りがかり、急いで先輩に電話をしたのだった。

---俺の彼女は、会う先輩や先輩の彼女に悉く気に入られていた。

いつも俺の前では大人びて見える彼女も、年上に囲まれて過ごしていると、いつもより少し幼くも見えて、みんなに可愛がられている彼女を見るのも好きだった---

と、ふとそんなことを思いながら、彼女の病室に向かった。
ドアノブを回す瞬間、今までにないほど緊張した。
扉をあけると、ベッドの上で彼女が弱弱しく横たわっていた。

こらえきれず、涙がこみ上げてくるのと同時に、
抑えようのない怒りも込み上げてきた。
なんで、俺に一言の相談もしてくれなかったんだろうか。

すでに衰弱しきった彼女に追い打ちをかけるように、
罵倒の言葉を浴びせてしまった。
彼女はその言葉も、黙って目を大きく見開きながら聞いているだけだった。

顔から表情が消えていた。
俺は頭を抱えながら涙を流し、彼女は声も出さずに、
次から次へと涙が頬をつたっていった。

永遠に会うことの出来ない我が子を思いながら、
ずっと彼女の手を握りしめていた。
気がついたらすでに深夜だった。

今まで、神頼みなんてほとんどしたことがなかったけれど、
もし、もし時間が巻き戻せるのなら、数時間前でいいから、
時間を巻き戻して欲しかった。

そして、、、もし、出来ることならば、1年前に戻って全てをやり直したかった。

夢想

その夜、二人で色々なことを話した。

禁句だと思いつつも、「もし子供が産まれていたら」なんて、もうどうにもならない話をして、二人でいつかそんな日がきたらいいね。と、少し夢半分で話してた。

その日は夜遅くまで話をし、俺も病室で一緒に寝た。

彼女が眠りにつきそうな顔を横目で見ながら、「ずっと一緒にいたい。」と心の底から思った。

今でもたまに、会えなかった子供のことをふと思うことがある。

もう小学生くらいになっているはずであろう我が子と、隣で楽しそうに笑っている彼女を思い浮かべながら、、、。

けれど、そんな日は永遠に来ることはなかった。

本当に手に入れたいものは、いつも手のひらから逃げ出していく。幸せになりたいはずなのに、二人の間にはいつも何かが立ちはだかっていた。

それが、二人の運命だったのかもしれない。

途切

あの事件以来、俺は自分の愚行を反省し、練習に打ち込んだ。
彼女への一番の償いと恩返し、早く活躍することだ、と悟ったからだ。
朝や晩の自主練習も再開したし、周囲も驚くほどに夜遊びもスパッと辞めた。

彼女とも、付き合い始めて、初めてとっていいほど平和な毎日だった。
彼女も昔のように、常に何か俺に対して遠慮がちだったところもなくなり、
やっとお互いが対等な関係になれた、と思えるようになった。

変に潔癖なところがある俺は、昔から人と打ち解けることが苦手だった
人見知りをするわけではないが、なかなか心を開くことが出来ない。
あまり俺を知らない人からは、明るく接しやすい性格だと思われるのだが、、、

地元を離れてから、本音でぶつかれる人が少なくなっていて
この頃の俺はかなり彼女に依存してしまっていた。
そんな状態の中、いきつけの中華料理屋で突然「プロポーズ予告」をしてしまい、
彼女を驚かせて泣かせてしまったのも、「彼女と結婚したい」という気持ちと同じくらい
「一人でいるのが怖い」という気持ちがあったからだ、と今となっては思う。

あの時、彼女に対して、もっと自分本位じゃない愛情表現が出来ていたら、、、
もっと彼女を安心させてあげることが出来ていたら、、、
もっと違う顛末が俺たちを待っていたかもしれない。

笑顔で別れたはずの、木枯らしが吹く肌寒い初冬の日を境に、彼女から連絡が来なくなった。

休戦

当時は、どれだけ考えても原因がわからなかった。

電話もメールも、返事が来なくなった。

あまりにも突然だった。

最初は、躍起になって電話を繰り返したが

1週間も折り返しがないと、彼女の身になにかがあったのでは？

と心配になり、意を決して彼女の実家にも電話をかけた。

「もしもし？」と電話口から聞こえてきたのは、紛れもなく彼女の声だった。

何も言わず、そのまま電話を切った。電話したことを後悔した。

2週間が経ち、いい加減目に見えない攻防に疲れた俺は、電話をかけるのをやめた。

後にわかったことなのだが、ホテルで鉢合わせした、

あの女の人が、後日彼女に酷いことを言っただらしい。

、、、といっても、未だに俺は彼女が何を言われたのかを知らない。

ただ、あの頃の俺はそんなことを知る由もなく、

正月休みで実家に帰ったときにも、初詣で

「彼女の受験がうまくいきますように」と絵馬に書き、

こんな女々しいことをしている自分に苦笑いしながら、この年の幕開けを迎えていた。

そんなある日、彼女から実に1か月ぶりに電話がかかってきた。

突然

お互い遠慮がちに「もしもし？」と口に出した途端、妙な沈黙が漂った。どちらも何と切り出していかかわからず、話したいことは山ほどあったのに最初に俺の口をついて出たのは「何か用？」だった。

こんなことを言ったら、負けず嫌いな彼女がムキになることもわかっていた。それなのに、照れ隠しと、この1か月の自分の不憫さを思い、ついついそっけない言葉を発してしまった。

どうやら、受験を目前に控え、不安になってしまったらしい。なかなか自分の弱みを俺にも周りにも見せない彼女が言うのだから、よっぽどなのだろう。半分冗談で、「今から遊びに来る？」と聞いてみた。

すると、「、、、行きたい。」と言われたのでさすがにびっくりした。俺は今、春季キャンプで沖縄にいるのだ。彼女もそれを知っているはずだが、、、。

その後もとりとめのない話をし、気がいたら2時間くらい経っていたので、「おやすみ」を言って電話を切った。その晩は、1か月ぶりくらいに熟睡できた。

翌朝、目覚めるとすでに日は高く昇っており、ホテルで同室だった先輩もオフを満喫するために外出してしまったようだ。さて、今日は何をするかな。

と思った矢先、電話が鳴った。
「沖縄、来ちゃった」
まさかと思ったが、、、苦笑いしながら、那覇空港に向かった。

背反

いつもは妙に大人びていて、常識はずれなことを割と毛嫌いする彼女がいきなり沖縄に来るとは、ちょっと想像していなかった。タクシーの運転手の話に適当に相槌を打ちながら彼女の待つカウンターに向かった。

少しキョロキョロしながら俺を待つ姿を遠目に見つけ、思わず走ってかけよってしまった。久しぶりに見る彼女の笑顔だった。

それから、その日は海辺まで行ったり、ソーキソバを食べたり色々したはずなのに、あまり覚えていない。この日の彼女はとにかく、よく笑っていた。彼女がずっと満面の笑みで過ごしている記憶ばかりが残っている。

これが二人で一日中一緒に過ごす最後の日だとも知らずに、笑って彼女を空港で見送った。

それからしばらくすると、彼女から「大学に受かった」と電話がかかってきた。さっそくお祝いをしようと、彼女を夜ご飯に誘った。実は、合格したら渡したいものがあったのだ。

いつもより奮発して、彼女が前から行きたいと言っていた西麻布のお店に向かった。席に着くと、いつもは早く来ているはずの彼女がまだ来ていなかった。10分ほど待つと、彼女が走ったであろうことがすぐにわかる息遣いで席に座った。

「合格おめでとう」と言いながら渡した箱には彼女が欲しがっていた指輪が入っていた。「婚約指輪はもっといいのを買ってあげるし」と笑いながら言った俺の言葉を聞くと彼女の頬を涙がつつたつたのを目の端で捉えた。

この日の彼女は、先日の沖縄とは正反対に、ずっとどこか暗い表情で過ごしていた。そして数日後、寮に小包が届いた。中身は、あの指輪だった。

別離

未だに、なぜ彼女があの時指輪を送り返してきたのか、俺にはわからない。ただ、俺も意地になり、あの直後に指輪を送り返し「お前に買ったもんだから、もっといてほしい」と書きなぐったメモを同封した。

そのあと、あの指輪がどうなったかは知らない。

ふとした瞬間に、彼女を思い出すことがある。
彼女が無理して吸い始めたタバコの匂い。
彼女が「大好き」と言っていた金木犀の香り。
彼女が大好きだったアイスクリーム。

もうとっくに彼女は俺のことは忘れて
きっと今頃他の誰かと幸せになっているのだろう、
と思う半面、どこかで、いつかは彼女が自分の所に戻ってくるのでは、
と心の片隅で思っていた。

あの別れから早1年半が過ぎていた。
新しく彼女も出来ていたが、いつもどこかで、
彼女のことを考えている自分がいた。

そして、、、
その年の彼女の誕生日の日、
俺は2軍戦ではあるが、先発することが決まっていた。
別に彼女が見に来るわけでもないが、なんだかいつもより、
少し緊張している自分がいた。

ウグイス嬢に名前を呼ばれ、マウンドに向かい
ふと客席に目を留めた瞬間に、よく見慣れた顔があった。
サングラスでごまかしていてもすぐわかる。紛れもなく、彼女だった。

白球を握りしめ、
「今日は必ず勝つ」そう心に誓い、
全力で振りかぶった。

退路

味方の援護もあり、久しぶりの勝利を手にした。
攻守交替でベンチに戻る度に、スタンドにいる彼女の姿を探すために
ゆっくりゆっくり歩いた。

俺の知っている彼女より、少し大人びた出で立ちで
ただ、ハラハラした顔で祈るようなポーズで
一心に試合を見守るところは、全く変わっていなかった。

ホームでのゲームだったので、勝利投手インタビューがあった。
「お世話になった方の誕生日だったので、勝てて良かったです」
本当は「大事な人」と言いたかったが、そこまで言う勇気がなかった。

ふとスタンドを見上げると、彼女が立ち上がるのが目に入った。
「まずい！」と思い、スタッフにお願いをして
彼女の特徴を伝え、いつもはスタンドに投げ込むウイニングボールに
「お誕生日おめでとう」と書き、託した。

今日、投げる時からやろうと決めていたことだ。

祈る気持ちでスタッフの後ろ姿を見守り、
スタンドで彼女がびっくりしながらもボールを受け取った
時、安堵した。

今日、勝てて良かった。

クールダウンのために、グラウンドでキャッチボールをしながら
肩を回しているとき、だいぶ観客がまばらになったスタンドに
少しポーっとしながら座り込んでいる彼女が見えた。

声をかけたかった、、、が、その勇気がなかった。

そんなとき、小さな男の子が彼女の傍に駆け寄った。
彼女も顔をほころばせながらその男の子と話をしていた。
ふと、こちらを見る彼女と目が合い、彼女が

「いいよね？」と聞いてきているのがわかった。

俺は遠くからゆっくりと頷き、目を伏せながら足早にロッカールームに戻った。

今頃彼女は、きっと、どうしてもボールを欲しがった男の子に

あのボールを渡しているはずだった。

そういうところも好きだったが、目の前でそれを見るのはさすがに辛かった。

彼女が最後に「ありがとう」と笑い返してくれた顔が、その夜は頭を離れなかった。

再会

あの「ありがとう」を最後に、彼女からの連絡も、突然の訪問もピタッと止まった。
徐々に、彼女が生活の一部から消えていくのを
寂しいけれど、自分でも意識をせずに日々が過ぎていった。

「現在」のことだと辛くて仕方がなかったことでも
いつからか「過去」になり、思い出に変わっていく。
悪夢のような一日も、最高に楽しかった一日も
すべて「いい思い出」になり、いつしか思い出すこともなくなる、、、

そんな「思い出」に変わってから、何年が過ぎただろうか。
毎年、最初に電話した、悪夢のような出来事もあった「あの日」
が来る度に、二人で約束したことを思い出した。

「10年後のあの日に、いつも会っていたあのホテルで会おう」

今思うと、本当に青臭い約束だ。
時間を決めたわけでも、どこで待ち合わせるかさえも、
決めていない、そんな約束だった、、、。

「あの日」から早5年以上たち、毎年恒例の春の沖縄でのキャンプ。
年明けから急にボールが投げられなくなり、それも、精神的なものによる、
と医者に言われていたのを克服しての、久しぶりの1軍スタート。

この年の俺は、練習もいままで以上に、本当に背水の陣で臨んでいた。
そんなある日ランニングをしていると、遠くからなんとなく見慣れた視線を感じた。
まさかという思いで、ゆっくりと、後ろを振り返った。

苦慮

もう、「記憶」というより「思い出」になりつつあった彼女との懐かしく、せつない出来事が一瞬のうちに頭の中を駆け巡った。友達であろう、同年代くらい人たちと遠くからこっちを見ているのがわかった。

「一体いまさら何をしにきたんだ？」と思いつつふと「順等にいけば大学を卒業するのだから、卒業旅行なのかな」とか思わず色々と考えてしまった。

それにしても、、なぜここに？
もしかして、友達が野球好きなのか？
それとも、、、、

しばらく見ていたものの、特に何をするでもなくそろそろウォーミングアップも終了し、別練習のために移動するときだった。

「写真とってもらっていいですか？」
カメラを構える彼女の友人の方をキョロキョロ見ながら、あの時の俺の表情は、完全に意表をつかれた表情だった筈だ。

内心は「ここで？いまさら？」と悪態をついていたのだが彼女の緊張とも笑いともれぬ表情に、そして彼女の友人たちも見つめる手前、もちろん「いいですよ」と言って、同じ写真に納まった。

さすがに、彼女が「ありがとう」と言った時に「なんで？笑」と訝しげに言ってしまったが、、、、

その日の練習は、ずっとうわの空だった。
いまさら、俺と写真をとってどうするのだろう？
いまさら、俺の練習を見に来てどういうつもりだろう？

夕食の時、先輩から「お前の元カノ見に来てたな。それとも、また付き合ってるとか？」

と冗談交じりに言われたり、良く一緒に食事に連れていってもらっていたコーチからは「俺のお気に入りが増えてたな～。休みだったら飲みに行きたいな～。」と真顔で言われたりした。

俺自身が混乱しているのに、「これ以上余計なことを言うな。」と言いたかったが、結局すべて曖昧な笑いで誤魔化した。ただ、、、どうしても聞いておきたかった。

夜、何度も寝ようとしては起き、最後は意を決して携帯を手にとった。もう、とうの昔に忘れていたと思っていた、彼女の番号をそらでダイアルした。呼び出し音が、1回、また2回、、、と鳴り響いた。

呼び鈴が10回鳴り響き、無機質な留守番電話のメッセージが流れた。
電話を置きかけたが、彼女に遠い昔初めて電話したときのことを思い出し
もう一度だけ、電話をかけることにした。

そして、、、5回呼び鈴が流れた後、明らかに緊張した声で
「もしもし」と彼女が応えた。
気まずい沈黙が続き、彼女がしびれを切らして
「元気？今日驚かせてごめん」と切り出した。

いざ、電話したのはいいが、言葉がうまく口をついて出ず、
あまりにもとりとめのない会話が続いた。
時間にして、たった3分くらいだったが、なんだかとても長いような、短いような不思議な時間だ
った。
彼女の声で名前を久しぶりに呼ばれて、なんだか少しこそばゆかった。

電話を切るときに彼女が
「頑張ってね。活躍楽しみにしてるよ」と言ってくれた時、
自分が投げられなくなるくらい、深刻な事態に陥っていたことなど到底言えず
「ありがとう」とだけ、短く返した。

最後に彼女が「電話番号、変えないからね」と少し笑いながら言った。
「俺も」と返して、二人でほぼ同時に電話を切った。

不惑

気がついたころには不思議なことに
何度思い返して見ても彼女との出会いから別れまで
全ての出来事が一貫して「いい思い出」に代わっていった。

辛い思い出も多かったのに、、、
彼女との思い出はいつも不思議だった。
具体的な出来事よりも「楽しそうに笑う」彼女の顔だけが
幾重にも重なり、いつしかその残像だけが蓄積されていった。

初めて1軍に昇格することが決まった日も、
初めて1軍で投げて、ヒットを打たれてしまった時も
初めて1軍で投げて、アウトを取った時も、、、

いつもどこかで彼女の残像が脳裏をかすめた。
ただ、それはもう取り返すことのできない、
紛れもない偶像だった。

いつになったら、この呪縛から解き放たれるのだろうか？
そう考えていた、まさにその矢先だった。

球団から「クビ」を意味する戦力外通告を受けたのが、
最後の最後まで皮肉にも
秋が深まりを見せる、彼女の誕生日だった。

贈物

戦力外通告に対する憤りや悔しさもあったが、
不思議と、なんだかどこかで「ホッ」としている自分もいた。
もしかしたら、ここ数年の間に、どこかで気持ちの糸が切れてしまっていたのかもしれない。

ただ、今までお世話になった周囲の人や両親、
傍で支えてくれた彼女、
応援してくれたファンの方、

そして、、、

誰よりも、何よりも、俺の活躍を心待ちにしてくれていた、
もう俺のこと等、とっくに過去になってしまっているかもしれない彼女に、、、
残酷な誕生日プレゼントになってしまうことが、一番心残りだった。

何回「活躍を待っていてくれたのにごめん」と
電話しようと思ったかわからない。
何度も携帯に手を伸ばしては、引っ込めた。

今更何を話すのだろう？
仮に話をしたとしても、きっと今まで通り、
平行線を辿るだけのはずだった。

あの頃、良く考えていたことがある。

きっと、二人が出会うまでが神様からのプレゼントで
それからの期間は、そのプレゼントの余韻だけ。
だから、これ以上望んではいけないのだと、、、。

ただ頭では分かっているのに、心がついてきてくれない。

気がつけばあっという間に年月が過ぎ、あの約束の年になっていた。
この夏も相変わらずの猛暑で、アスファルトに照りつける太陽が
むき出しの腕に容赦なく反射する。

行くべきか行かないべきか。

気がいたら約束の日は後2日に迫っていた。

いつの間に、こんなに時が経ってしまっていたのだろうか。

この10年を振り返っても、様々な出来事が起きた。それはきっと彼女も同じであろう。
10年前に交わした、あの約束を、まだ彼女が覚えている保証など、どこにもなかった。

ただ、、、行かずに後悔するより、

行って、現実を目の当たりにしてから諦めるのでも遅くないかもしれない。

そんなことを、延々と考えながら気がついたらあのホテルの前に立っていた。

相変わらず夏の日差しは強く、自分の悩みなど本当にちっぽけに思えるほど

自分のまわりは目まぐるしく動いていた。

この雑踏の中にも、俺と同じような悩みを抱えている人が、どれだけいるのだろうか？

約束の日の前夜、、、ホテルの部屋で缶ビールを飲みながら
様々なことを思い出していた。

手紙をもらった日のこと、初めて電話をかけた日のこと、

初めて会った日のこと、、、そして、別れた日のことを。

朝早く目が覚め、いくつかのコンビニを廻った。

彼女が大好きだったアイスクリームを、たくさん用意しておきたかったのだ。

急に思いついたことだったが、何でもいいから、彼女と俺を結びつける思い出や

品を、出来るだけ多く手元に置いておきたかった、、、、、、

永遠に巡って来ないと思っていた時間が、

もう目の前まで迫ってきている。

時計の針が、いつもよりずっとずっと早く回っている気がした。

やはりもう、彼女は来ないのだろうか、、、

諦め半分でロビーを見まわすと、ふと、目の端が彼女らしきシルエットを捉えた。

ただ、確かめに行く勇気も、自信もなかった。

このために来たのに、このまま引き下がってしまうのか？

と思った瞬間、フロントの係が目に入った。

ホテルに備えつけの紙に、部屋番号を書きなぐり、彼女に渡すよう、伝えた。

後は、、、彼女次第だった。

解放

自分の目で現実を知るのが怖く、足早に部屋に戻った。

後は、、、待つしかなかった。

先ほどとは打って変わって、永遠に時間が止まってしまったような、そんな気がした。

いざ、顔を合わせたらなんて言えばいいのか？

どうしたらいいかわからず、ひたすら部屋の中を

何往復も何往復もした。

ふと顔を見上げた瞬間、ドアをノックする音が聞こえた。

昨日今日とあんなに悩んでいたのに、足は一直線にドアに向かっていて。

深呼吸をして扉を開けると、初めて会った時とは正反対の、

今にも泣きだしそうな顔の彼女が立っていた。

彼女を部屋の中に招き入れ、いてもたってもいられずただただ抱きしめた。

どのくらいその状態でいただろうか、、、

「そろそろ話したいんだけど？」と腕の中からおれを見上げた彼女の顔は覚えていたとおりの、あの笑顔だった。

急に、自分が10年前の高校生に戻った気がして、なんだか照れくさい気分になった。

離れていた年月を埋めるかのように、二人でベッドに座り、

ずっとずっと話していた。

長い間自分を悩ませていた呪縛が、ようやく少しずつ解れていく、、、

なんともいえない安堵感に包まれていた。

逆行

離れ離れだった時間を埋めるように、とりとめのない話をたくさんした。
ただ、互いに現在の自分のことは、ほとんど何も語ろうとしなかった。
やっと訪れた久しぶりの時間を、現実が打ち壊してしまうことが怖かったのかもしれない。

気がついたら彼女が「、、、そろそろ行かなきゃ」と言って、ゆっくり立ち上がった。
けれど、、、、、、その場を動かそうとはしなかった。

突然、「ありがとう」
彼女が少し笑いながら言った。
「今まで本当にありがとう。」

彼女が言わんとしていることは分かった。
が、それを受け入れきれない自分がいた。
だから、その話には触れずに俺も
「ありがとう」と応えた。

そして、「さよ、、、」と彼女が言いかけた瞬間
「またいつか、どこかで」と遮り、
「もう一度チャンスをもらえるなら、、、なんとしてでも取り戻したい」

彼女は少し困った顔で、また
「ありがとう」と言い、
少しさみしそうな顔をして部屋を後にした。

彼女が去った後の部屋で
外のセミの鳴き声が耳に鳴り響く。
ふと耳を澄ますとドアの外で、消え入りそうな泣き声が聞こえた。

ドアを開けた瞬間、「本当に待っていてもいいの？」
と廊下で佇んでいる彼女を再び部屋に引き入れた。
自分の気持ちを制御出来なくなっていた。

このまま、あの道をまた逆戻りするのだろうか？

結局答えは、どちらも持っていなかったし
お互い、どうしたらいいかもわからなかった。

再び彼女が去ったあとの部屋は、すっかり夕日が差し込み
秋の訪れを感じさせる、少し肌寒い風が吹き込んだ。

なんだか、今日一日の出来事が幻のようで、
長い夢から覚めたような、短い夢の中で過ごしていたような、不思議な気持ちだった。
ただひとつ間違えなく言えるのが、
もう一度、何も考えなくても良かったあの頃に戻りたかった。

そして、もう一度、すべてをやり直したかった。

最近ふと、遠い昔に彼女が言っていたことを思い出す。
まだ二人が何の疑いもなく幸せだった頃。

「よくさ、『一番好きな人と一緒にならないほうがいい』って言うのって、きっと
その人が亡くなる時の悲しみや苦しんでるところを一番近くで見なくていいからなのかもね。
、、、違うかなあ？あたしはなんとなく、その気持ちがわかるような気がするな。」

いつも色々考えすぎて、あれこれいらぬ心配をする
彼女らしい発言だ、とその時は大して気にも留めずに少し笑いながら聞いていた。
二人が一緒になると信じて疑っていなかったからかもしれない。

ただ皮肉にも結局、二人は一緒になることはなかった。

つい最近彼女に、
「覚えてるかわからないけど、
俺はやっぱり一番好きな人と一緒にするのが幸せだと思うけど？」と聞いた。

少し長い沈黙のあと、
「そうかなあ。それはまだ本当に一番好きな人に出逢っていないからかもよ？」

と、電話の向こうでつぶやいていた。
電話口で、少し微笑んでいる気さえした。

「どこかでまだ、俺と一緒にになりたいと思うこと、、、ある？」

「やっぱり昔のあたしは間違っていなかったと思うんだよね。
だから、きっと、あたしはあなたと一生一緒にいることはない」

